

「圧倒的な力を受ける秘訣」 使徒言行録 2：1～13

I 導入部

おはようございます。6月の第二日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。今日はペンテコステ礼拝、聖霊降臨日です。全世界の教会で、ペンテコステの礼拝がささげられています。

去年のペンテコステの礼拝の時、私たちは海外旅行をして、言葉で苦勞することが多いのですが、来年には、こちらが日本語を話せば、相手に英語やフランス語で話され、相手の話す英語やフランス語が日本語になって聞こえる機械ができているかも知れませんが、というような話しをしたのですが、できましたね。ポケトークやその他の機械があります。買われた方や海外旅行で使用された方もおられるでしょう。今月、私の誕生日ですので、プレゼントを考えておられる方が、もしおられたらよろしく願いいたします。

今日は、使徒言行録 2 章 1 節から 13 節を通して、「**圧倒的な力を受ける秘訣**」という題でお話し致します。旧約時代は、ある特定の人だけに神の霊、聖霊に満たされたことが記されていますが、ペンテコステの日には、イエス様の約束の言葉を信じて、祈待ち望んでいた 120 名の人々の上に聖霊が与えられたことを聖書は語ります。そして、ユダヤ人を超えて異邦人にまで聖霊が与えられるようになるのです。その記事を見たいと思います。

II 本論部

一、聖霊は語らせるのです

イスカリオテのユダが死んで抜けた 12 弟子の一人を選び、祈り待ち望んだ 120 名の人々は、ただイエス様の約束の言葉を信じて、聖霊が与えられることを信じました。2 章の 1 節には、「**五旬祭の日が来て**」とあります。聖書辞典によれば、五旬祭とは、ギリシャ語では 50 日目を表し、旧約聖書では「七週の祭り」(出エジプト 34:22)、「刈り入れの祭り」(出エジプト 23:16) に相当するものとあります。また、この祭りは、過越し節の第二日（アビブの 16 日）から数えて七週の後、第 50 日目のシワンの月の 6 日に守られたようです（申命記 16:9）。元来は、小麦刈りが終わった時の鎌納めという、農耕的起源を持つ祭りでしたが、後代のユダヤ教では、この日にシナイ山で十戒が与えられたという歴史的意味を加えて、律法記念日として守られたと記しています。

旧約聖書では記念となる、この日に聖霊が与えられたのです。ですから、イエス様が復活してから 50 日目、イエス様が天に帰られてから 10 日目ですが、農耕的な起源や歴史的な意味がある、この記念する日に聖霊が与えられたということは、神様ご自身の思いがそこにあったことを思わされます。

120名の人々が一つとなり集まっている、そこに、「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」と聖書は語ります。風という言葉は、聖霊を示していると言われます。イエス様もヨハネによる福音書3章で、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」と言われました。 祈り待ち望んだ群れに、突然、神の時がありました。「激しい風が吹いて来るような音」とありますから、ゴーゴーというような大きな音、何かを感じられるような音だったのだと思うのです。

3節には、「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」とあります。「炎のような舌」とありますが、出エジプト記3章には、モーセがミディアンの荒野で、燃える柴の木を見ます。神様は燃える柴の炎の中から語られるのです。そしてモーセは神の声を聞くのです。モーセは、炎の中から神様の言葉を聞いて、神様にエジプトに遣わされ、神の証人としてファラオに神の言葉を語る者になるのです。

ペンテコステの日、120名の人々の上に、「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」のです。「舌」とは、語る力として与えられたように思うのです。モーセが燃える柴の中から炎を見て、神の言葉を聞いたように、聖霊が与えられた時、炎のような舌、まさに、神様のみ業、神の言葉が与えられるのです。私たちは、聖書の言葉を通して、神様の言葉を聞き、神様の証人として、神様の言葉を語る者とされていることを覚えたいと思います。

二、聖霊は全世界の人々に福音の恵みを語られる

4節を共に読みましょう。「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」 聖霊に満たされた人々は、自分が話すユダヤの言葉ではなく、他の国の言葉、外国の言葉を話したということです。各地からエルサレムに集まっていた人々は、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、驚いたのです。ポケットクのように、自分の理解できる言葉で聞くことができたのです。聖霊を受けて、今までに話したことのない外国の言葉を話しました。弟子たちは、ひそかに外国の言葉を勉強していたわけではありません。聖霊に満たされた時、「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」とあるように、神様に力が与えられて、外国の言葉で語り出したのでした。弟子たちは、この後、その外国の言葉を話し、宣教したというわけではありません。おそらく、外国の言葉を話したというのは、この時だけだと思われます。弟子たちは、イエス様の証人となり、地味で、地道な宣教の働きを続けていくのです。聖霊が与えられて、驚くような力を発揮し、奇蹟を起こし続けたわけではありませんでした。イエス様が「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」と語られたように、イエス様の証人として、神様の業を語るのです。

120名の人々は、聖霊に満たされて、外国の言葉を語りました。それは、神の偉大な業、イエス様の十字架と復活を語ったのです。それが、語られたのは、イスラエルで生活していたユダヤ人と、ディアスポラと言われる外国で育ったユダヤ人とユダヤ教への改宗

者の人々だけでした。ここに神の民が結集され、教会の誕生となったのです。このみ業はユダヤ人から始まりました。それは、神の民イスラエルを引き継ぐ者だからです。

ペンテコステとは、ユダヤ人やユダヤ教に改宗した人々の上に、聖霊によって神様の偉大な業が語られ、救われる人々が起こされ、教会が誕生した記念すべき日です。今日は教会学校では、教会の誕生日ということで大きなケーキでお祝いしているみたいです。各地から集まった人々に、外国の言葉、世界の言葉が語られたということは、新しいイスラエルの歩みが、ユダヤ人だけのものではなくて、やがて、福音は異邦人、全世界の人々へ伝えられるようになるということだと思ふのです。

これから弟子たちは、ユダヤ人だけではなく、異邦人に、全世界に神の業、イエス様の十字架と復活を語る者になるのです。やがてパウロは、特に異邦人伝道のために用いられるようになるのです。私たちは、弱い者ですが、聖霊に強められ、導かれて、私たちの今置かれた場所で、イエス様の福音の恵みを語る者にさせていただきたいと思ふます。

三、神の偉大なみ業が語られ続ける

創世記 11 章には、人間が神に挑戦しようとしてバベルの塔を建てますが、神様は人間の言葉を乱し、言葉が通じないようにされたので、話の通じる者たち、同じ言葉を話す者たちは、それぞれに分かれて行ったのでした。

ペンテコステの日、聖霊が与えられ、聖霊を受けた人々は、イエス様の証人として、神の業である十字架と復活について語りました。言葉の通じない人々が、聖霊の働きによって、神の偉大な業を聞いたのです。聖霊は、人々を統一して世界共通語なるものを語らせるといふものではありませんでした。それぞれの国の言葉や文化、歴史や習慣の違いが尊重されて、全ての人々が同じ神の偉大なみ業、イエス様の十字架と復活、福音を聞くものとなるのです。聖霊の働きを通して、イエス様の証人となりイエス様の十字架と復活を通して与えられる魂の救い、罪の赦し、復活の命があることを聞くのです。この福音によって、イエス様によって、全ての人々は一つにされるのです。

バベルの塔を建設し、神に成り代わろうとした人間の傲慢や自己中心的な罪のために、神様は言葉を乱し、言葉が通じないようにされたのです。言葉の通じなくなった人間が、聖霊の導きによって、神様の介入によって、福音により、様々な違いはあるけれども、イエス様にあつて一つとされていくのです。

エルサレムに集まった外国語を語る人々は、「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」と驚きました。ユダヤ人である彼らが、確かに自分の理解できる言葉を話しているということは事実なのですから、その驚きは隠せませんでした。しかし、この出来事を理解できない人々は、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言つて、神の偉大な業、イエス様の十字架と復活を聞いても、信じなかつたのです。かえつて、バカにしたのです。あざけつたのでした。

私たちは、私たち自身がイエス様の十字架と復活が自分の罪のためであつたことを聞いて、罪を認め、罪を告白して、イエス様の身代わりの十字架の愛を感謝して、イエス様を救い主とし心に受け入れて救いを体験しました。しかし、私たちの住む日本においては、

イエス様の十字架と復活、福音の話聞いても受け入れる人が少ないのが現実です。

けれども、聖霊に満たされたペトロのメッセージ、イエス様の十字架と復活、福音のメッセージを通して、自分の罪を告白し、イエス様を救い主と信じて、3千人の人々が洗礼を受けてクリスチャンとなったのです。

日本においては、まだまだ、福音のメッセージが人々に伝えられていないというのが現実なのかも知れません。イエス様の十字架と復活を通して与えられる福音の恵みを一度も聞いたことがないというのが、今の日本の状況かも知れません。とするならば、教会が、牧師が、クリスチャンの皆さんが、聖霊に支えられて、聖霊によって力を受けて、イエス様を、福音を伝えていきたいと思うのです。あのように弱く自分中心であった弟子たちも、聖霊に満たされて、力を受けてイエス様の証人として、力強く証ししたのです。

私たちが弱い者、小さい者、数少ない者ですが、聖霊に支えられ、励まされて、私たちがイエス様を信じる者であること、神様が全ての人を愛しておられることを伝える者とさせていただきますと思うのです。

Ⅲ 結論部

弟子たちは、120名の人々は、圧倒的な力を受けました。しかし、その力とは、人々に驚くような奇蹟を見せるとか、人間以上の力を現わすというようなものではなく、イエス様の証人として、イエス様のことを、十字架と復活を、神の偉大なみ業を語る者となるということなのです。

私たち自身が、イエス様の愛に満たされて、神様の愛を一人でも多くの人々に語りたいと思うのです。信じるか、信じないかは神様の責任です。救われるのは、神様です。私たちに責任はありません。しかし、イエス様の事を、十字架と復活の事を、私たちがそのまま、無条件で愛し、受け入れて下さる神様のことは、聞いたことがないという事になれば、それは、先に救われた私たちにも責任があるように思うのです。

どのような方法であれ、イエス様の愛を一人でも多くの人に伝えたいと思います。本来ならば、最も近くにいて愛されるべき親からも愛されないでいる人、誰にも愛されたことがないという人もいるでしょう。けれども、イエス様だけは、あなたを愛している。愛し続けていて下さる、と伝えたいのです。なぜなら、すでにイエス様は私たちを愛するがゆえに、私たちの罪の身代わりに十字架にかかって死んで下さったのです。死んで終わりではなく、よみがえられ、天に上り、私たちに聖霊を与えて下さるのです。与えられた聖霊によって、私たちは力を受けるのです。私たちは、神様の霊に満たされてイエス様を証しする人となるのです。弱くていいのです。だめなままでいいのです。神様が聖霊を通して、私たちを強めて下さるのですから、安心してイエス様に全てをお任せして、この週も歩んでまいりましょう。「**あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。**」というイエス様の言葉は真実であり、成就するものなのです。